
faker/stay night

Mr.HANA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

f a k e r / s t a y n i g h t

【Nコード】

N 8 9 4 7 Z

【作者名】

M r . H A N A

【あらすじ】

第四次聖杯戦争を終えた衛宮切嗣。だが彼は自身を蝕む呪いと、まだ聖杯戦争が終えていないことを知る。

自身の業とその技の全てを彼はたった一人の少年に託すことにした。少年の名前は衛宮士郎。

そして少年の運命は、全く別の軌跡を描くことになる !

第零話『邂逅』（前書き）

作者の処女作です。

全てを諦めた正義の味方が、もしその禍根に気づいていたら。

グロ描写。若干のエロ描写。

また、MOB程度にオリキャラ、独自解釈あります。苦手な人は注意。

第零話『邂逅』

正義の味方に、なってくれないか？

親父は言った。

勿論。だって、ソレが俺の願いなんだから

俺はそう言つて、小指を伸ばした。

結ばれる二つの指。

それが俺の約束。

それが俺の全て。

あの月の綺麗な縁側で結んだ。

衛宮士郎を形作る、たった一つの願望

たとえそれが、どんなに

いたとしても

魔術とは人の手を用いて人為的に起こす神秘・奇跡のことである。

人の意識、無意識は元々一つの渦に？がっている。

細分化した流れの中で一般的な方法ではたどり着けない、その元に？がる探求をする者達がいる。

それこそが魔術師と呼ばれる存在だ。

彼らは原初にして1。根源と呼ばれる大本を学ぶために魔術という奇跡を学ぶ。探求こそが彼らの魔術を行使する理由であつて、魔術

を行使する、ことが目的となってしまうっては、それはもう魔術師ではない。
ましてや、それを自分の快樂のために使うなど。
許されるはずが、ないのだ。

闇夜の埠頭を一つの人影が駆けて行く。

その男は奇妙な風貌をしていた。やつれた西洋風の顔立ちに黒のドクロを模ったフード付きパーカーと、長い足に似つかない短パン姿何より奇怪な部分は、その露出した首元と両足に巻きつくように存在する、銀の鎖の存在である。

無数に絡まるその鎖は、まるでそれぞれが意志を持つように、装飾者の身を縛り、蠢いている。

刹那、空からの一条の閃光が男を襲う。

それは閃光と言うには眩し過ぎる、破壊の光だ。光は不規則な軌道を描きながらも男に、迫る。

「
！」

金切り声のような叫びが、男の声から漏れ出る。瞬間、男を縛る鎖が反応した。液体のように波紋を浮かべた鎖が風を切り、幾重もの盾となって男の頭上に展開する。

一重二重三重

巻きつく回数を増やすことによって、その硬度を増していく。

男は水銀を固定化した魔術を得意としていた。

彼を守る鎖は『墮落した蛇』と呼ばれ、一種の魔術礼装としての機能を有していた。遠距離からなら弾丸も防ぎうるその防御に、男は絶対の自信を持っていた。

しかし頭上から来襲した光は、その男の自信とともに、水銀の守り

の力を無残にも貫く　　！

「な　　！？」

目を見開く男を、そのまま紅い光が飲み込む。

光が晴れたとき、彼の胸元には朱色の刃が突き刺さっていた。自分の防御が破られた、その絶望を持って絶命した男の前に、一つの影が姿を現す。

絶命した男が奇妙と言うのなら、現れた影は異端であった。身の丈を覆うような灰色の外套。鍛え、無駄の無い全身の肉を黒塗りの甲冑が被さっている。

茶の短髪とその顔立ちはまだ幼さを残すものであるが、その目付きは鋭く激しさと獰猛さを感じさせる。

何より目を引くのは手だ。

その手には、現代という時代に合わない黒塗りの弓があった。

灰色の外套を身に纏う少年は刃を生やす男を見つめていたが、ふうっと喉を吐くと、弓と男に突き刺さった刃が光の粉となって消える。

「正義の味方　　俺が望むモノ　　これが？」

慟哭にも似た呟きが、誰もいない空間に浮かんで消えた。

灰色の少年の名を、衛宮士郎。

それは確かに正義の味方を目指す　　紛れもない殺人者であった。

第零話『邂逅』（後書き）

とまあ始まりました。

原作とは全然違う展開になっていきますが、どうかご容赦下さい。

第一話『最初の日』（前書き）

衛宮士郎君の受難は続きます。

どこまでも正義を目指す彼の行方は。

第一話『最初の日』

私はこの屋敷の主が嫌いだ。

古い住宅郡を抜けた先に、その屋敷はある。

屋敷の主の名前を冠したそこは、一見、時代を感じさせる門を構えた屋敷に過ぎない。

だが見る人間が見ればその歪さが際立って見える。

人払いの呪いに有象無象の魔術、機器の罟。感知の術は至るところに張り巡らされ、進行を妨害する使い魔を含めれば、その件数もの数百。

普通の魔術師ならば、ここまで大げさにしない。

これでは隠れる意味などない。工房というものは偽装を含めて工房なのだ。

だというのにここまで過敏に張り巡らされていれば、一介の魔術師ならばすぐにその存在を気づき、はぐれ者ならばなお、探るように行動を開始するだろう。

それを気づきながら、この屋敷の主は平然としている。

まるでそれが、当たり前だといわんばかりに。

「本当、傲慢の塊みたいな工房」

ドアノブを鳴らす。出てきた声に感情を押し殺した声で答えた。程なく、機械作りの門が開き、中庭へと通される。同時に地面に走る魔術の郡には目もくれず、足早に屋敷へと向かった。

「あ。ようこそ遠坂」

屋敷の扉を開けて現われたのは一人の少年。

シャツにジーパン姿のラフな格好。

気まずそうにこちらを見るその姿は、それだけ見れば気さくな好青年に見えないことはない。

だが私は知っている。

「わざわざ出向いたのよ。はぐらかしていた報告、聞かせてもらえるんでしょっね！」

「うん。話すよ、きちんと」

この屋敷の主は嫌いだ。

衛宮士郎

何故なら彼の、この地を管理する遠坂凜への告解は、結局のところ、事後報告でしかないのだ。

それも恐らく 殺人の。

居間に案内されて、手持ち無沙汰に近くにあつた蜜柑をむいでいると屋敷の主が何かを抱えてやってきた。

「何よ、それ」

「遠坂はデジタル派じゃないだろ。だからこれ、報告書」

「余計なお世話っ。貸しなさい！」

全く、バカにして。

そもそもデジタルなんてねえ！唾棄すべき進化なのよ！常に優雅たれ、が家訓の遠坂がカチカチやってなんてられないわ、だから良いの！

なんて憤りを浮かべながらそう、彼が渡した書類を見る。

一枚目には複数の角度で取られた一人の男の写真。やつれた碧眼がこちらを睨んでいる。

「ネル・レイバーク……元協会所属のはぐれ、ね。錬金術に優れる、か」

「魔術礼装は水銀を用いたものだった。でも他人の残した研究成果を元に模倣して作成したと思う」

「……なんでそんなことが分かるのよ」

「本人の技量と持っているものが割に合ってなかった」

衛宮が言うには、何か元々あったものを自分用に使えるように改悪したものだったらしい。

「もし、きちんとしたものだったら。俺は危なかったと思う」

「危なかった、ね。これ、協会には？」

「勿論送った。というか依頼が協会から来たんだ。事後処理含めて」

「……アンタ、ねえ！」

ぶちきれる。もう限界だった。

「いい加減にしないでよ！最近の協会の管理者軽視にはうんざり！アンタがなんだか知らないけど、この地、冬木は遠坂が管理しているものよ」

冬木市。

山と海に囲まれたこの市を管理するのは私、遠坂凜が党首を務める遠坂家だ。

そこで起こる魔術を含んだ現象、トラブルは全て管理する魔術師の管轄内での事だ。他者の魔術師が絡んだときこそ、管理者に連絡して事に当たらなければならない。

だというのに目の前の少年が一年前、外国からこの地に帰って来て、歯車が狂いだした。

協会と強いパイプラインを持つ彼は、率先と協会から魔術犯罪を犯した人間の処分を受け持った。それも特に、冬木市の関連で。

「前もそうだった。その前も！これで三件目」

常に優雅たれ、の家訓。

今だけ捨てさせてもらう。

「管理者にも連絡を取らず、独断で行動して全てを成功させる。衛宮。確かにアンタは凄いわ。その歳で才能を最大限に生かして。でも、アンタがやっていることは」

「これで良いんだよ。遠坂」

言葉を被せるように呟かれた。

怒りを貯めて、その顔を睨みつけようとして、

瞬間、息が、詰まった。

「これで、良いんだ」

その笑顔は、あまりにも弱く。

今にも崩れ落ちそうなくらい、危うかった。

第一話『最初の日』（後書き）

どこまでも不安定な土郎君。
当分戦闘パートはありません。

第二話『これから』（前書き）

年末のちよつとした一息。

視点がコロコロ変わる小説は悪い小説だそうです。

という訳で士郎視点。あれ、悪い小説・・・？

第二話『これから』

「もう、良い」

目の前で肩を上げていた怒気がふつと抜けたのが感じ取れた。止めたりボンと黒髪を靡かせ、一回鋭い眼光がギリリとこちらを睨んで、

遠坂は立ち上がった。納得してないだろう感情を飲み込んだのを見て、申し訳ない気持ちになる。

「帰る」

窓を見ると、外の陽は既に落ち、黒の一色に染まっていた。なら一人で帰すわけには行かない。

「送るよ」

「はあ？」

目を丸くした遠坂というのは、初めて見た。そのまま考えるように眉間に皺を寄せて、

「……もしかして、私。だれかヤバイ魔術師に狙われてる？」

出た結論は、予想外に重かった。

「いや、そんな話しは聞いてないけど　そうなのか？」

「なわけないじゃない。私はこれでも恨みを買わないことだけは気

をつけてるんだから　じゃなくて！」

ぷんつと手を振る。

「じゃあ何？外に私の色香に狙いを定めた不良の集団の待ち伏せでも察知した？まあ流石に大人数だと魔術無しは厳しいから、手伝って欲しいけど」

「いや、そんな気配は無いけど」

本当に、そんな気配は無い。
あれはすぐに潰している。

「じゃあ、何よ！？この会合も一回目じゃないでしょう」

「いやだって、前は明るかったし」

「はあ？明るさが何の関係があるのよ」

「だって危ないだろう。遠坂は女の子なんだから」

は？

瞬間、空気が固まった。

まるで予想外の言葉を受けた、と言ったような風に遠坂の表情が固まる。

まさか自分の容姿が引き起こす事態を予期していないのか。それは非常にまずいと思う。

「いいか、遠坂。暗がりつてのは危ないんだ。何処に何の危険があ

るか分からない。そもそも、視界の届かない場所っていうのは、たとえ目の前であっても、死角になりうる。ましてや遠坂は女の子だ。それを一人で暗がりに帰すなんて

「ぶっ……ぶぶっ……」

急にお腹を押さえだす遠坂。

そして、次に聞いたのは。

「あーはっはっはは！おっつかしい。この、魔術師である私に、夜は危ないって。それも凄腕のアンタが必死な顔で、そんな普通のことを……っくっく。傑作だわ」

「何でさ。普通のことを言って、何が悪い」

言外に込められた異常性しかないと感じていた、との言葉に若干憤りを感じる。

「だって衛宮。アンタってばこの一年、仕事の殺しの話しかしてなかったじゃない。でもそんな気遣いがあるんだって、思ってね。ごめん、気を悪くしたなら謝るわ」

「必要だったからな。不必要な話しは、基本的にしないほうが良いだろうと思って」

「心の贅肉……」

「心の贅肉？」

「ううん、こっちの話し」

はー、笑ったと涙を浮かべながら、少女は指を玄関に向けた。

「良いわ。あんたの一面を見せて貰ったし、お礼に送らせてあげる」

そう言っつて口角を上げ、意地悪そうに微笑む遠坂に。

いつも仮面のような顔をしてたから意外だ、と思うと同時に。

そういえば、今、自分はどんな顔をしているのだろう、と思った。

遠坂を送って家に帰ると、消していた筈の玄関に付いた陽が、来客があることを伝えていた。

鍵を使い扉を開けると、上品に置かれた学校指定の女子用のシューズが一足と、どこかずさんな

……というか脱ぎ散らかされた靴。

「やれやれ。藤ねえは前も注意したのに……」

「あ、先輩。お邪魔しています」

廊下まで上がったところで、エプロン姿の桜が姿を現した。

「桜、ただいま」

衛宮士郎には現在、二人ほど家族がいる。

一人は目の前にいる間桐桜。

所属する学校の一つ下の後輩だ。

触れれば倒れてしまうような、そんな繊細な一面しかなかった現代を生きる大和撫子。 だったのだが、ある出来事を切っ掛けに家に出入りするようになった。

おしとやかな振る舞いと、学園一位のスタイルで学園の人气が遠坂と二分しているとか。

「すみません、夕食の準備、先に始めちゃいました」

「遅れたこっちが悪い。手伝うよ、」

「はい、今日は豚肉が安かったので、肉じゃがでもしようかと」

「肉じゃががあ。じゃあもう一品付けようか」

そんな和やかな時間を、突然現われた猛獣がぶち壊す。

それは黄色でしましまなジャングルの王者、ライオン。 ではなくて、

「うおーん。桜ちゃん、あたしゃお腹減った。減ったたら減

っ。 おっ、士郎。お帰りいー」

そう言っつて現われたのは藤村大河。 別名、藤ねえ。

親父の縁のあった家の人で、むかしから家族ぐるみの付き合いをしていた。

俺が外国に言っつている間、一年間、この家を管理してくれた人だ。

そして、俺が在籍する学園の、教師だったりもする。

「藤ねえ。また靴を脱ぎっぱなしにしてたろ。前も言っただけどさあ、

良い歳なんだから」

「そんなこと覚えてませんー！しかも歳とか言ったら……戦争でしょうが」

「うわ、どっから出したその木刀！」

「もう、二人ともやめてください！先輩、早く夕食の支度を」

こうして騒がしい夜は更けていく。

騒乱の中で、どこか冷めた自分が、何度も考えたかことを、思う。

「あーもう、悪かった！じゃあ、藤ねえの好きな一品付けるから」

「本当！？もう土郎、大好き」

「藤村先生、良かったですね」

この人達にだけは。

自分の仮面の下の素顔を、見せたく、なかった。

第二話『これから』（後書き）

話し進まないー！

でもまあ、下味からゆっくりと。

家族紹介は漫画版の *f a t e* を参考にさせてもらいました（という

かほぼ投影しました。私は死ぬべき）

そろそろ物語りを動かします。

第三話『運命の夜』（前書き）

そしてある日の幻想。

少年は、決断を迫られる。
彼が求めたそのクラスは

第三話『運命の夜』

二人が帰ったその日、夢を見た。

『良いかい』

これははるか昔の記憶、まだ親父が生きていた頃の記憶だ。

『君の魔術形態は特殊だ。僕ですら、底が見えない。いや、違うな。底は見えているんだ。だが、深さが分からない。つまりね、士郎。君は本当に特殊な才能を持っているんだ』

『才能？』

幼い自分の問いかけに、切嗣は静かに目元を弓状にする。

『ただ。最強には、なれないだろう。それこそ、伝説とまで言われた魔法使いとまではいかないと思うし、一流の魔術師になるのすら、難しいかもしれない』

『正義の味方に、なれないのか？』

『士郎。正義の味方は何だい？』

幼い自分は何と傲慢だろう。

この問いかけは幾度も、切嗣によって行われた。それは一種の儀式であって、誓いなのだ。

『大切な人を、守ること』

『そう。そして、常に最良の選択が出来ること』

そして切嗣は構える。手に持つ　二挺拳銃を。

『だから士郎。僕が教えるのは、魔術師になることでも、ましてや魔法使いになることでもない。勿論、魔術の授業でもない。僕は君の才能を開花させ、正義の味方にする』

発砲と同時に、切嗣は言葉を紡いだ。

『だから士郎。君は強くないといけない。それが、あの大災害を生きた、君の意味だ』

だからそう、最後の言葉もきつとそうだ。

廃人寸前の体を限界まで動かした。

親父が長生きできるはずも無く、

衛宮の血統を引き継いだ俺は、一年間、世界を回ることになる。

外道に生きる者を狩り、立ちふさがる者は区別なく排除した。

自分と他人の血と肉と、骨と、残された悲哀を身に受けながら、ただの一度も感謝などされない。

それで良い。それでも、良いんだ。

もう二度と、あの悲劇は繰り返さない。

そのために、俺は生き永らえてきたのだから

こうして運命の夜は訪れる。

意識が覚醒したとき、自分の体の感情が、その日であることを告げていた。

体に起こる高揚感は、一体いつからのものだったか。

家を出、工房に向う。

肌を突き刺す寒さを感じない。たった一つの儀式がいま、行われようとしていた。

聖杯戦争

たった一つの、全てを叶える杯を巡って行われる魔術師同士の殺し合い。

この冬木の市に降臨する偉大な器を巡った戦争。

その儀式に参加する絶対条件。

それこそサーヴァント。

七つのカテゴリに分類された、英霊達。

聖杯をもってしても、絶大な力を持った彼らを召還するのは容易ではなく、それぞれの役割を演じさせることによって、その顕現を可能にする。

セイバー

アーチャー

ランサー

ライダー

キャスター

バーサーカー

アサシン

その全てを叶える聖杯を巡って、同じ願望を抱く、死した先人達と共に戦場を駆ける。

まずは聖杯の意志によって選ばれた人間達が、これらのサーヴァントを手に入れなければならぬ。一年前、冬木に戻ったのはこの為だ。

そう、俺には願望がある。

誰にも負けられない、願望がある。

工房　に着いた。

工房と言っても、外見はただの倉だ。昔、切嗣と共に集めた先人の武具の破片と

魔術の術式を指す、幾重に渡った円が床に描かれている。

そもそも英霊を呼ぶには、その英霊を指す触媒が必要だ。

でなければ、全く別のモノを呼んでしまうこともある。無作為に聖杯だけを求める、邪悪なモノを。

だが、切嗣は言った。

そんなものは必要ない　　士郎。

君がいるだけでいい、そして呼ぶんだ。

後のお膳立ては、全部僕が

僕が　仕立てあげるから

さあ信じろ、そして願え、衛宮士郎。

「我は血肉を携え、道を作るものなり。

されど汝は、その剣を曇らせ、我はその檻を開放せし者

き、絡み合っ。

「これは、一体。どういうことですか！？マスター！？」

少女のような、声だった。

見える翠の瞳は、王が如き光彩だった。

その輝きこそ本来ののサーヴァントになるはずだった、純白の騎士、セイバー。

「騎士王。許しを請おうとは思わない」

誇りも信条など、そもそも戦いには必要ない。

しかして最良、そして最強のサーヴァント、セイバー。

その手綱を握るために、親父が仕掛けた罠。

その魂を汚し尽くし、顕現前に全てを以って屈服させる。

宗派、魔術体型、外法。それら全てを以って、

「セイバー。君を、手駒とする　！」

「やめ　。あ、ああああああああ」

そして、魂すら変化させ、召還システムすら歪にした儀式を終え、文字通り、黒の霧が晴れると、そこには魂を縛られた騎士が立っていた。

黒い甲冑に、視界を塞ぐバイザー。手に持つ剣は赤の波紋を光らせ、視界を歪める。

薄く汚れた金髪を持つ　少女の姿をした青白い英霊は問う。

「問おう。貴様が、私のマスターか」

凜とした声には気だるさと、空虚なモノが入り混じる。

「そうだ 宜しく頼む。セイバー。いや」

それは魂を汚した者の、ケジメだった。

「セイバー・オルタ」

人為的に性質を反転させた。

まさに自分に相応しい、目的を持った仲間だった。

第三話『運命の夜』（後書き）

という訳で召還しましたセイバー。

絶対無敵の礼祝で縛るのではなく、そもそも性質を変化せよと考

えた親父エ・・・

原作のオルタさんとはちょっと違います。性能とか。

……というか召還システムってこんなことができるんだろーか・・・？

まあそれは二次創作ということw

では、ここまで読んでいただいてありがとうございました。

第四話『願い』（前書き）

何かが歪な聖杯戦争。

召還に成功した。

衛宮士郎は次なる作戦に出る。

それは 買い物だった。

第四話『願い』

「長き夢を見ていた」

セイバー・オルタは、呟くように言う。

そして魔剣と化した剣先をこちらに向けた。

「我が性質を反転させようとは。思いもしなかったぞ」

「……俺を斬るか。オルタ」

「オルタ？ふむ、それが私の名前か　そして動じないか」

なるほど、悪くない。

そう云って、オルタは武具を降ろす。

「同士討ちになりかねん。なるとしても不貞が原因以外では受け付けん　しかし、貴様。もう一度確認させてもらおう。貴様が私のマスターなのだな」

「ああ、そうだ」

左腕の甲を見せる。そこには先ほどまではなかった、剣を模した紋章が浮き出ている。

召還時に焼け付くような痛みと共に刻まれたコレは、聖杯戦争に参加したことを証明する

「確かに令呪だ。聖杯のバックアップにより、命令を三回までサーヴァントに遵守させる絶対的なもの。そして聖杯戦争に参加するこ

とを現すモノ　認めましょう。貴様は私のマスターだ」

「やけに素直じゃないか、オルタ。自分の有り様を曲げられたんだぞ。正直、ここで令呪をひとつ使う予定だったんだけど」

「反転した今では、こつちが今の私です。騎士道に生き、裏切られるより疲れていたのかもしれないね私は。と言っても、もう知るよしもあります。さて、肩の力を抜きませんか」

そう言つて、セイバー・オルタは魔力で形成された鎧を解いた。もう一度言つ。顕現したばかりのオルタが、自分を形成する鎧を解いた。

勿論、その下には、何も現代の衣服など着ているはずもなく。

「……」

「……」

一糸纏わぬ姿の少女が、目の前で無言で立っている。水をも弾く初々しい肌と、鍛えぬかれ、それでいて幼さを感じさせる肢体。

まだ発展途上とは言え、色のつく前の林檍のような危ういアンバランスさは、見る者によっては劣情を催しかねないものだろう。

「服のある場所に、案内するよ」

「お願いします」

全く恥じ入る様子がないことは、流石は英霊と言ったところだろうか。

まずは現代の振る舞いを教えないといけないと考えながらも、裸の英霊を誘導するところから、マスターの仕事が始まった。

部屋に戻って、唯一ある箆笥から服を取り出した。

女性物の衣服は下着を含めては英霊を召還する前準備として上下で5セットほど準備をしており、群青色のスカートと、リボンがワンポイントな女性物の衣服を渡す。

「何ですかコレは。センスのカケラもありませんね」

そして目の前で4セットまで破壊された。

ご丁寧に手の魔剣を持って。

斬られたというより、文字通り粉みじんになった衣服を見て、

「何でさ」

「マスター。貴方が私の主となるのならば、ひとつ学んでおくが良
い」

剣を消して、唯一残った衣服を着用しながら。

「私はおとなしい服が嫌いだ。私は男物の服が嫌いだ。私は愛らし
さのある服が 好きだ」

「服に執着する英霊なんて聞いたことがないよ」

「ならば聞いておきなさい。マスター、戦場視察も兼ねて明日は買

い物に行きましょう。それまではこの、まあ、布きれで我慢します」

「……良いけど」

おかしいな。

親父の言っていたセイバーと大分違う。

頭でっかちで、騎士道という言葉で戦争を美化する狂信者。

故に他のことは特に気にしない　特に文化なんて。

もしかして反転させたことによって、抑圧してたものが出てきてしまったとか。

「そういえばマスター。よく私を引き当てましたね。何か触媒でも残っていましたか？」

「うん？いや、特にない」

「ほう　なら、マスターの性質と私の性質が似ていましたか」

触媒なく召還されたサーヴァントは、そのマスターに似通った者が呼ばれる。

似通ったとは外見ではなく、魂のあり所、生き方。そして、その運命。

「私を呼ぶ前提で大規模な魔術を準備していましたから、何か触媒があると思っていましたが　時にマスター。貴方との魔力の供給ラインはきちんと？がっているようですね」

「みたいだな」

魔力の供給ラインとは

マスターとサーヴァントを繋ぐ補給路だ。

如何に聖杯のバックアップがあつても、英霊という人知を越えた存在を顕現させ続けるのは容易ではない。だからこそ魔術師であるサーヴァントには魔力を、つまり車に例えるならガソリンを供給する必要がある。

それがきちんと？がつているということは、何の問題もなく、聖杯戦争を戦えるということだ。

よし。ここまでは問題なしだ。

全て事前に考えていた通り　衣服を除いて。

ならば最後に　ここで明らかにしないといけないことがある。

「聞かせて欲しいことがある。もし嘘をついてると俺が思ったら、令呪を使つても聞き出す」

「剣呑ではありませんね。良いでしょう。何ですか？」

「君は、今回の聖杯に何を求める？」

英霊が招きに応じるのは、叶えたい願いがあるから。

性質を反転させたとしても、その魂のあり方は分からない。

であれば、目の前にいる英霊は、反転させようとも、あの偉大なる王だ。

抑圧されたものから解放されたとき、残るモノは一体何だ。

そして、それは、呆気なく

オルタの口から語られた。

「何も求めない。私の願いは意味などなかった。そう、修正を加えたのは貴方ですよ、マスター」

「ッ
！」

分かっていたことだった。
英霊の矜持を踏みにじる。

それは願いを上書きし、そもそもの聖杯戦争の意義を奪う。
そうすれば反感する心も、放漫とした考えも、無くなる。
ただ主である、マスターに従う道具に成り下がる　！

「すまな
」

馬鹿か！

何を言おうとした、衛宮士郎！

駄目だ

俺はまだ、完全な正義の味方にはなれていない。
自分の行いを、貫いた相手に反省するなど

「貴方の願いは？」

オルタは謝罪の言葉を区切った不自然さを無視して、言った。
ここで俺は、仮初めの願いを言うつもりだった。
だが、自分の最良の選択で、罪もない人間を初めて、辱めたことは。
本当の言葉を、口に出す。

「俺の願いは
」

そして告げる。

衛宮士郎の正義のあり方を、今まで生きてきた意味を。
その集大性ともなる願いを聞いて、オルタは

少し、本当に、少しだが。
この状況を楽しむかのように。

「面白い。貴方の願いは荒唐無稽だが面白い。確かに、願望機には
ぴったりだ」

反転した、汚れた王に賞賛の言葉を受ける。
それだけで、少し救われた。
たとえ狂気を孕んでいたとしても。

「ではマスター。状況確認とお互いの確認をしましょう。明日は動
かないといけません」

「釘を刺しておくが買物物が主じゃないからな。そうだ、オルタ。
マスターじゃ良いにくいだろう。俺のことは士郎で良い」

「分かりました、シロウ。貴方の魔術と戦闘スタイルをお伺いして
も？」

「ああ、俺の得意な　　というか、これしか出来ないんだけどな。
それは　　」

夜がこうして更けていく。

今まで親父以外と、こんなことを話したことなどなかった。
並び立つ存在が再び現われたことにほんのすこしだけ、喜びを感じ
ながら。

最初の夜が、終わった。

第四話『願い』（後書き）

はい、一晩目終了です。

因みに原作のオルタさんは、もっと傲慢不遜な話し方ですが、ゲームでは土郎君にだけ本来の喋り方をしているシーンがあったので、そちらを採用しました。

第五話『槍兵』（前書き）

そろそろバトルをしないと……
冗長になっている本作を読んで頂いている全ての人に万感の感謝を。

第五話『槍兵』

信仰に携わる道具と、荘厳な空気。

聖母を模った鏡を背に、冬木市の協会の一室で男は語りかける。

「七人のマスターと七体のサーヴァントの召還を確認した。いまここに、聖堂教会と魔術協会の名の下に、第五次聖杯戦争の開幕を告げる」

神父服を身に纏う男以外の姿は、その室内に存在しない。

だが、確かにそこには、主の命令を受けた使い魔たちの姿がある。勿論、俺のモノも含めて、だ。

「喜べ、汝ら。いま、お前達の願いは叶うのだから」

男の名前は、言峰綺礼。

それは確かに今回の戦争での監督者であり。

第四次聖杯戦争で親父に倒された筈の、悪であった。

場所は変わって冬木市、新都。

平日の昼間とあって人通りはさほど多くも無い。

そんな寒空の中を、俺とオルタは歩いていった。

聖杯からのバックアップは生きた時代の違う英霊たちの知識を補完しているはずだが、

「あれは何ですか?」「なるほど、知識としてはあるが、現物を見てみると」「シロウ、お腹が空きました」「ほう、巨大な建造物だ。これを私の時代にも建てられたならば」「あれがセンタービルですか。弓兵に配置されると厄介だ」「シロウ、お腹が空きました」「これが、車。伝令として使えそうですね」「シロウ、お腹が空きました」「シロウお腹が」

……と言った塩梅で。

時代の違うものに興味をそえられるのは、英霊とて同じらしい。目に映るもの全てが、彼女にとっては絵物語の世界なのだ。しかし、どれだけお腹が空くんだろうか。

「お言葉ですが、私とて好きで食べている訳ではありません。私のスペックと貴方の魔力総量では補充出来る量が違う。今のうちに英気を養う必要があるのです」

食料で力を得る英霊なんて聞いたことがなかった。

だが英霊は様々な意味で規格外だ。その彼女が顔色ひとつ変えずに言うのだから、事実なのだろう……多分。

「でもなあ。こっちとしてはショックだぞ。端正込めて作った料理は全て駄目で、そこら辺で買ったハンバーガーのほうが好み、だなんて」

「決してシロウの料理がマズイというわけではありません。味覚が多彩な色を奏で、もし私の時代ならば群集の舌を虜とするものであったでしょう。軍も百年は戦えた。食卓の間が活気が出、もしかし

「たら我が祖国が無数の栄光を得ていたかもしれません」

「そんな大げさな」

「シロウ！貴方は私の国の料理を知らないからそんなことが言えるのです！」

「うお！？初めて怒られた！？」

「今ではもうその味を思い出したくも無い。固く、味付けのない肉。しなびた野菜……ああ」

「すまん。悪かった」

「謝ろう。オルタが虚空を見ながらぶつぶつ言い始めた。仲間割れの原因が食の意見の相違。なんてなった日には目も当てられない。」

「いえ、分かって頂ければ良いのです、シロウ」

「でも、それこそなんでうちの料理は駄目なんだ？得意不得意はあるが、和、洋、中と準備したのに」

「駄目なのです、貴方の味は気品があり、高潔だ。性質の変わった私では受け付けない」

……成程。性質を反転させたことがこんなところにも。オルタが手に持つ。現代のお気に入り。ハンバーガーの袋を破く。

「しかるに！この退廃的な味は！過敏に舌を刺激することだけを考
えられた、健康のひとつも考えない塩分！暖めなおされたと言えど、
刈り取られ時間が経ち中身を磨耗させた肉！ぱっさぱさの、その場
しのぎで挟まれた野菜！ふははは、今の私にふさわしい」

ぱっさぱっさと袋を開け、もっきゅもっきゅと中身を消費していく
セイバー・オルタ。

かの伝説に聞く王の姿を、ここまで欠食動物に貶めてしまった。
親父。やはり俺たちは地獄に落ちるべきかもしれない

「っと。そろそろ片付けておけ。着いたぞ、オルタ。ヴェルデだ」

今日、こうして彼女と歩いていたのには訳があった。

召還してからというものの、オルタが熱心に衣服を望んでいるから
である。

現地視察も兼ねて、こうしてわざわざ新都まで足を運んだのはその
ためだ。

ヴェルデ。

冬木市新都にその身を置く複合型ショッピングモール。

今まで足を運んだことはなかったが、土地の傾向を知るために買った
冬木市雑誌『huyuhuyu』

そこには年頃の女の子が選ぶベスト10の題目で多くの衣料専門店の
名が有り、

それらは全てヴェルデに出店しているものだった。

「了解しました、シロウ。貴方には戦いのセンスはあるようだが、
服のセンスがない。それを私が伝授してあげましょう」

そう言って、オルタが先陣を切る。

その威風堂々な金髪の少女と、付き従う従者のような少年に道を行

く人々の視線が集まる。
ともあれ結果だけを述べれば、オルタの気に入る店は見つかった。
その店は、少女の幼さと幻想性を限界まで演出し、動きやすさ？人の目？なにそれ美味しいの？と強烈な個性を弾く至高のジャンル。一言で言うなら、ゴシッククロリータを専門とするお店だった。

場所は再び変わって、冬木市中央公園。
とある災害によって破壊された場所は、復興計画によって広めの公園になっている。
帰り道の休憩として入ったその場所に、手に持つ多くの衣類の入った袋を、青々と芽吹いた草花の上に置く。

「結構な重さだったな……」

幾ら資金に余裕があるとは言え、買いすぎた。

「店員も目を丸くしていましたね、シロウ」

そう言ったオルタの姿は、もう買い与えた衣服に変わっていた。
白と黒を基調としたドレス。靴は格調高い品のあるもの。肩のみを露出させ、手までを覆うは長い袖。

陶器のように青白く、唯一光のある金の髪がその白黒原色二色の中

で浮き出ている。
それは病的にまで

「うん。似合ってるよ、オルタ」

「当然です」

やや息を飲み、明後日の方向を見るオルタ。
なるほど。賞賛の言葉は受けなれているのかもしれない。
さて 周囲を見渡す。

「オルタ。分かるな？」

「ええ、シロウ……作戦通りですね」

オルタが頷いた。

公園に入ったときから肌を焼きつくような感覚。

隠しもしない、熱を帯びた殺気が、こちらに向けて放たれている。
殺意の刃が空気に重さと熱みを感じさせ、水分を欲した咽が乾く。
一歩でも動けば、戦端が開かれるだろう。
故にオルタが動いた。

「出で来い。名も知らぬサーヴァントよ。まさか我が面を拝謁する
ことすら恐れるか」

明らかな挑発の言葉。

もし相手がマスター殺しの強みのあるアサシン、最弱とは言え多くの
手管を持つであろうキャスターならば、この言葉に反応しなかつたはずだ。

だが、今回の相手は、その言葉を挑戦と受け取った。受け取って、

くれた。

「良いねえ、俺好みだ。生きが良い」

そう云って、雑木林から来訪者が現われる。

蒼炎の髪をくすぶらせ、手に持つは血が如き光彩を放つ身程の朱槍。青を基調としたその男は、見まごうこともない。

「なるほどな。奇妙な反応があるから狙いを定めていたが 見事に釣られたって訳だ」

「言葉など不要だ。貴様、ランサーだな」

「そう言うお前はセイバーとお見受けするぜ」

ランサー。

青の甲冑に身を包み、獣が如き殺気を隠しもしない。

セイバー・アーチャーと並ぶ三騎士の一人。

恐らく、全サーヴァントでアサシンに次いで速度のあるサーヴァント。

この男が 最初の敵。

「しかし、その姿は何だセイバー。まるで人形みたいだな」

「ならば、貴様好みにしてやろう」

魔力が凝縮され、黒の霧がセイバーを覆う。

次の瞬間には紅い波紋を浮かべる甲冑と、視界を歪ませる魔剣を手に持つ少女が立っていた。

「オルタ」

声を掛けると、視界だけこちらに向ける。

「釣れたサーヴァントは一体のみだ。また、マスターの気配は無い。今回は、俺は戦わない。その実力で、最速の攻撃を持つであろうランサーにどう戦えるのか　お前の実力を見せてくれ」

「承知した」

頷き、向き合う。

勿論、戦いたくないはずが無い。

今すぐ、あの小さな背中の前に立ち、目の前の強敵を防ぎたい。しかし出来ない。してはいけない。

衛宮士郎の得意とすることは、解析だ。

モノの有り様を見つけ、綻びを探し、真偽を明らかにする。

ならば、最初にすべきは自分の駒の確認だ。

ポーンか、ルークか、はたまたクイーンか。

ステータスだけでは見えない。実際の彼女の動きで、その戦いを決めなければいけない。

一方、盤上の騎士たちは、己の武具を携え、強敵に構える。

先に動いたのはランサーだった。

風を切り、身を鏃のように捻り上げ、手に持つ槍をオルタに向けて放つ。

その渾身の一撃を、手に持つ魔剣で切り結ぶオルタ。

「やるねえ！」

瞬間、ランサーの手が幾重にも分裂したかのように見えた。そもそも槍とは自分の射程を持っている。

弓より短いその射程は、しかし円を描く軌跡を持って、相手を間合いに近づけさせない。

故に、剣を持つセイバーにランサーが取った方法はひとつ。剣より長いその射程での、目にも止まらぬ高速の突きだ。

闇に落ちた召還によって本来ある風の加護を失い、セイバーの速度は急激に落ちている。

なので回避することは出来ない。残像を描く破壊の渦に、成すすべもなく貫かれるしかない。

ならば避けなければ良い。

オルタは剣を振り、風を斬り直撃の未来を次々と裁いていく。速度が落ちているといっても、それは自分自身の動きだ。

故に彼女の持つ本能、それは天性の直感というべきものだったがランサーの攻撃を防ぎきった。

「なに!?!」

動きから鈍さを感じた故に選んだ最速の攻撃を防がれ、初めてランサーの瞳に驚きが走る。

その隙をオルタは見逃さない。

単一となった槍の軌道を読みきり、上段から最後の一撃を叩き落とす。

反動によって槍を地面に向けたランサー。その瞬間、飛び越えるように、セイバーが迫る。

「ちいっ」

しかし、槍兵の反応も早い。

迫られたと分かると、手元の紅槍を回転させ、即座に守るように携

えた。

その守りごと、黒き魔剣を振り下ろす　！
金属のぶつかる音と、発生した衝撃が公園の緑の波を浮き立たせた。
圧によって地面を擦りながら、数m引き下がるランサー。

「やるじゃねえか　！セイバー！」

吼えるように叫ぶ。

その顔には自分の間合いに入られた怒りよりも喜悦が浮かんでいた。
獲物を見つけた狩人の目。

対するオルタの表情、呼吸共に変化がない。

ただ抑揚のない瞳で剣を携える。

「御託は良い。口ではなく槍で語るが良い、ランサー」

「俺の魔槍を望むか。しみつたれたマスターにぶつかったときは
どうしようかと思っただが、この戦いなら悪くねえ　！」

瞬間、圧が更に重みを増した。

肩に掛けるかのように槍を携えるその奇妙な構えは、しかしランサ
ーの本来の流れなのだろう。

熱を持つ魔力を身に抱え、その全身全てを槍を放つ兵器となつたら
ンサーが言う。

「この槍にかけて、貴様を撃つ　！」

宝具。

この世界で失われた先人達と共に、伝説を作った、偉大なる武具。
その力を解放してこそ英霊達の真価は発揮させられる。

いま、ランサーは手に持つ宝具を使おうとしている。

次の一手は必殺の一撃となるだろう。

オルタも剣を構える。

如何なる攻撃も防ぎ、その一撃を相手にぶつけるために。

「その心臓、貫いっける！」

禍々しい殺気を穂先に込め。

ゲイ

「刺し穿つ　！」

それは今までの非にならない、まさに必殺の技。

ボルグ

「死棘の槍　！！！」

朱の魔槍。

その不可避の一撃が、オルタを襲った。

第五話『槍兵』（後書き）

ながーい。

戦闘シーンは書いていて本当に楽しいです。

ここまで読んで頂いてありがとうございます。

ステータス『セイバー・オルタ』（前書き）

ここでちよつと一息。

今作のセイバー・オルタのステータスです。

以降、このステータスは変動しません。

……特定のイベントを経ない限りは。

ステータス『セイバー・オルタ』

【CLASS】セイバー（オルタ）

【マスター】衛宮 士郎

【真名】??

【性別】女性

【身長・体重】154cm 42kg

【属性】秩序・悪

【ステータス】筋力B 耐久C 敏捷D 魔力B 幸運B 宝具B

+

【クラス別スキル】

対魔力：B

魔術発動における詠唱が三節以下のものを無効化する。

大魔術、儀礼呪法等を以ってしても、傷つけるのは難しい。

……闇属性に染まっている為、対魔力が低下している。

騎乗：

騎乗スキルは失われている。

【固有スキル】

直感：B

戦闘時に常に自身にとって最適な展開を“感じ取る”能力。

常に凶暴性を抑えている為、直感が鈍っている。

魔力放出：B

放出される魔力はセイバーが意識せずとも、濃霧となって体と剣

を覆う。

黒い甲冑と魔力の余波によって、防御力が向上している。
また、供給を増やすことによって身体能力が向上される。

カリスマ：E

軍団を指揮する天性の才能。団体戦闘において自軍の能力を向上させる。

統率力こそ上がるものの、士気は極度に減少する。

??????:?

【宝具】

「?????」

ランク：A++ 種別：対城宝具 レンジ：1～99 最大捕捉：
1000人

黒い極光の剣。所有者の魔力を変換する増幅器である為、
黒化したセイバーの聖剣の光も、同じように黒色となっている。

「?????」

ランク：EX 種別：結界宝具 防御対象：1人
詳細不明。既に失われており、使用不可。

「?????」

ランク：C 種別：対人宝具 レンジ：1～2 最大捕捉：1人
詳細不明。ステータスですら効力が発揮し、読み取れない

ステータス『セイバー・オルタ』（後書き）

一応参考は衛宮くん時点のセイバーステータス。
それと原作のオルタの性能を合わせました。

あとオリ設定をちよこつと。

もうちよつとマシな人ならもっとパワーアップするの……

第六話『正体』（前書き）

年末しか筆を取れないので一気にいきます。

第六話『正体』

一筋の閃光を放つその魔槍に、確かに目を奪われていた。
これぞ宝具。

これぞ 英雄の技。

同時に頭の中で警鐘が鳴り響く。

幾重も想定した中で、最悪のパターン。

もし、俺の予想が外れていないのなら。

アレを避けることなど、不可能だ。

絶対的な幸運と充実した対魔力。そこに幾つもの天凜があつて、初めてアレを避けられる。

見える。

因果を捻り、運命を選定する。

これぞ、あの宝具の特性 ！

「令呪によつて命ずる！オルタ、避ける！」

聖杯のバックアップは、何もサーヴァントに言うことを聞かせるものだけではない。

その身体的な補正すらも、令呪は可能とする。

そして強制力は、オルタに劇的な変化をもたらした。

捻り曲がる朱槍は弾いたように見えても、その因果は確定している。故にオルタは、全身の力と令呪のサポートで魔力を放出、爆発的な跳躍を後方に行う。

「無駄だア！」

だが追撃するランサーはその朱槍を伸ばした。

なにか 顔に生暖かい液体が飛び散った。

顔を半分覆うほどの量。

口に入る液体は、纏わりつくような不快感。

「……え」

たとえ射程から離れたとしても、一度発動した宝具は止められない。跳躍の最中、胸を撃ちぬかれた鎧の少女が土煙を上げながら足元に転がった。

床に伏す彼女の顔は見えないが、だらりと力なく沈んだ金髪が、自身の赤い池に色を変える。

どくん、と。音がした。

目の前が赤くなる。

読み間違えていた。技量を測り損ねていた。自分の魔術師としての技量は分かっていたつもりだった。

なのにこのありさまか

「やるようだったが ここまでか」

脅威がやってくる。

死を携えた槍兵が、猛然と歩みを進めてくる。

マスターを守るべきサーヴァントが倒れた今、そのマスターの結末は決まりきっている。

人間の身ではまず、彼ら英霊には勝てない。

衛宮士郎の結末は決まりきっている。

従者と同じように刺され、穿たれる。

だが、だが。

血に沈む、小さな指が、華奢な手が動いた。

まるで足掻くように、小さく、なぞるように、何度も自分の判断不足と、その結果なのに。俺のサーヴァントは 諦めて、などいなかった。

「はは」

ならば、何を迷うことがある。

この身は魔術師殺しの後継者。

神秘に怯えてその名を語れる筈が無い

！

「手前、気でも触れたか」

異変に気づき、ランサーが足を止める。

それに向って言ってる。

「ランサー。お前は勝った訳じゃない！」

「何だと……？」

「オルタは、他の英霊の様子と、その实力を見る為に、力をセーブして戦わされていた。マスターであるこの俺によって。彼女が負けたのは俺のせいだ！」

「強情を誇って騎士の戦いを汚すか、小僧 ！」

聞く価値もないと朱槍が振るわれる。

その一撃は速く、鋭い。

衛宮士郎にとって受け止められるはずの無い一撃を。ならば、と割り込んだ少女が受け止めた。

「な！」

「全く。令呪を使うなんて、作戦にはありませんでしたよ、シロウ」
驚きの声はひとつのみ。

立ち上がると信じていた騎士に掛けるねぎらいの言葉は一つだ。

「助かった、オルタ。やはり普通の魔術師のような作戦では駄目みたいだ。だから 主のミスを、挽回してくれ、騎士よ」

「何を今更。我が剣は貴方と共にある」

そしてオルタは戦線へと復帰をする。

携えた魔剣は、先ほどの光とは別のモノ。
彼女の本気だった。

「槍を構えよ、ランサー」

極光を放つ剣を手に、騎士は告げる。

吹き荒れる魔力の渦が、公園を揺らす。

暴風などというのは生ぬるい。破滅の奔流。

ランサーは、その圧倒的な力を目にして、手に持つ相棒を握り締め
る。

「最高だ。お前らは。良いぜ、なら限界まで」

だが、猛る英霊はその動きを止めた。

かちかちと震える手を、何かを振り払うように奮い。

「糞が」

唾を吐き手に持つ槍を、消した。

この場で？何故だ。

疑問に答えるように、ランサーは言う。

「マスターの指示でな。これ以上は、駄目だ。命を失いかねるのでな」

「お前も偵察だったのか、ランサー」

「さあてな」

「待て！貴様！」

「追ってくるかセイバー。なら死を覚悟してきな あばよ」

ランサー。風のように襲来し、風のように去って行った。

追いかけてようとすがるオルタを止める。

「何故ですかシロウ」

「俺が。今日は俺のミスだ。だが約束する オルタ」

それは、親父以外には絶対にしたことのないもの。

正義の味方は約束を破らない。

俺にとっての約束はソレだ。誓約に近い。

「もう、絶対にミスをしない」

「……ならシロウ。私もひとつ約束しましょう。あの者は私が討ち

ます」

そして、すこしふて腐れるように。

「急所から外れたとは言え、あの槍は私を確かに貫きました」

「そ、そうだ。大丈夫かオル」
「鎧を解除したセイバー。」

その下には先ほど買ったドレス服。
そして左胸にぽっかりと空いた穴。
無論、それは肌に達している訳で。

「
タ」

「ほら、もつとよく見てくださいシロウ。傷は治りますが服は……折角買ったのに　　と、何と。置いていた衣服まで風で飛ばされてボロボロになってるだど！？く、くつく。絶対に、絶対に許さんぞ槍兵　　！じわじわとなぶり殺しにしてくれる　　！」

少女の慟哭が鳴り響く。

どこかしまらない戦いだったが、お陰で大体オルタの動きは理解した。

それにランサーの素性も、その戦い方も。

大きな収穫を得て、聖杯戦争最初の戦いは終結する。

セイバーオルタ vs ランサー

その戦いは、引き分けに終わった。

第六話『正体』（後書き）

ランサー戦終了です。

こうして令呪をひとつ失いましたが、

身を捨て実を取ったという形に終わりました。

次はアーチャー戦となります

ステータス『ランサー』（前書き）

今回判明したランサーのステータスです。
士郎君の判別した内容となっております。

ステータス『ランサー』

【CLASS】ランサー

【マスター】??

【真名】クー・フリーン

【性別】男性

【身長・体重】185cm・70kg

【属性】秩序・中庸

【ステータス】筋力B 耐久C 敏捷A 魔力C 幸運E 宝具B

【クラス別スキル】

対魔力：C

第二節以下の詠唱による魔術を無効化する。

大魔術、儀礼呪法など大掛かりな魔術は防げない。

【固有スキル】

戦闘続行：A

往生際が悪い。

瀕死の傷でも戦闘を可能とし、致命的な傷を受けない限り生き延びる。

仕切り直し：C

戦闘から離脱する能力。

不利になった戦闘を戦闘開始ターン（1ターン目）に戻し、技の条件を初期値に戻す。

ルーン：B

北欧の魔術刻印・ルーンの所持。

矢よけの加護：B

飛び道具に対する防御。

狙撃手を視界に納めている限り、どのような投擲武装だろうと肉眼で捉え、対処できる。

ただし超遠距離からの直接攻撃は該当せず、広範囲の全体攻撃にも該当しない。

神性：B

神霊適正を持つかどうか。

高いほどより物質的な神霊との混血とされる。

【宝具】

『刺し穿つ死棘の槍』ゲイ・ボルク

ランク：B 種別：対人宝具 レンジ：2〜4 最大捕捉：1人
突けば必ず相手の心臓を貫く呪いの槍。ゲイボルクによる必殺の一刺。

その正体は、槍が相手の心臓に命中したという結果の後に槍を相手に放つという原因を導く、因果の逆転である。

ゲイボルクを回避するにはAGI（敏捷）の高さではなく、ゲイボルクの発動前に運命を

逆転させる能力・LCK（幸運）の高さが重要となる。

『???』

ランク：?? 種別：対軍宝具 レンジ：? 最大捕捉：???

クー・フリーリンの伝承ではゲイ・ボルクを投擲している場面がある。

対軍用の技がある???

ステータス『ランサー』（後書き）

このステータスと、士郎の分析力を用いて聖杯戦争の対抗策が練られていきます。

第七話 『卓袱台の上での戦争』（前書き）

ここまで読んで頂いた方々に全ての感謝を。
遂に始まった聖杯戦争。

ランサーの能力を把握した士郎は、次の一手を打つ。

第七話 『卓袱台の上での戦争』

「つまりシロウ。ランサーのマスターの目的は？」

「敵情視察と言いたいが、そもそも戦闘能力の高いランサーを使いっぱしりにするか？サーヴァントの素性がばれたら対策だって打たれてくる。なら、目撃者を倒したほうが効率が良い」

ランサー……その宝具はゲイ・ボルク。

ならば間違いなく、英霊の名前はアルスター神話で無類の武勇を誇る男、クー・フリーンだ。

宝具はその英霊の素性を現す。

となれば能力、射程など弱点は見えてくる。

現に今回の戦闘で、ランサーの癖や宝具の能力は大体、解析できたのだから。

「それはどうでしょうか。あの槍兵。身のこなしは大したものですが、それに対人戦ではあの宝具、かなり有効に思えます。見破られても痛くないのでは？そもそもマスターに狙われたら対処が難しい。そう脅威付ける目的かもしれません」

「うん。その線もある。だからこそ、あの状況は事前に令呪を使つてまで生還を命令する程か？」

「令呪を、使われていたのですか？ランサーが」

「好戦的な性格で戦つことを第一としている風に見えたよ。そんなサーヴァントが大人しくマスターの言葉を受け取るとは思わない。

恐らく、だけど」

それに、確かにセイバーの宝具の威力を見せつけていたとはいえ。まだアレだけじゃ中身も実力も分からない筈だ。何か引つかかる。

「まあ、このことは追々考えよう。ともあれオルタ。傷は大丈夫か？」

「ええ。何とか致命傷は避けました。しかしシロウ。この宝具では令呪を使わず、避けるつとだけ言って頂ければ結果は同じだったのでは？」

「いや、あの場では仕方なかったさ。俺の判断ミスのせいなんだけど。良い機会だ。このゲイ・ボルクの対策にもなる。教えておこう」

あの戦いを終えて、俺たちはもう一度店に戻り服を購入して帰宅した。

その頃には陽は落ち、夕暮れに差し掛かっていた。

夕食を作り、お互い交代で風呂に入り。

そして今、応接間の卓袱台に座り、戦略を練っている。

因みにオルタはハネの生えたパジャマという、何とも珍妙な格好をしている……

「あの槍の怖い所は、因果を逆転させることだ」

「因果を逆転、ですか」

「そう。普通なら、？槍を放つ＝行為【因子】、？相手を切り裂く

「結果【現象】 この順番だろう」

「ええ。現にあの一撃以外は全てそれでした」

「だがあの一撃は違う。技を発動させた瞬間に決着がつく。つまり、行っていることは同じだが能力を発動させると？相手を切り裂く」
結果【現象】 ? 槍を放つ 行為【因子】 となる」

「それならばあの現象に納得は出来る。つまり突けば必ず結果を付随させるといふことか」

「この技の怖いところは、恐らく急所を穿つという運命を確定させるといふことだ。つまり技を発動すればどう足掻いても急所に当たる。打ち勝つのはただひとつ、幸運の値。運命を好転させる能力のみ」

「ならばなおのこと、分からない。何故三つしかない貴重な令呪を」

「オルタ。戦場に出て殺される確率と、自陣の砦で殺される確立。どっちが高い？」

「裏切りを考慮しないなら勿論戦場 あ」

「そう、あるとき、確かに技は発動していた。だけど、爆発的な力を得た跳躍は、近接距離ではなくその射程外まで逃げていた。槍の射程から外れた結果なんて、本来の幸運が無くても確立は高まる。それでも、あの有様だけどね」

目の前の相対して刺し貫かれる運命と。

射程外まで逃れて刺し貫かれる運命。

実現しない確立はどうしたって射程外だろう。

「だからランサーと戦う時は短期決戦か、あの必殺技を撃たせる隙を与えない連続戦闘。もしくは受けきるしかない。逆に言えばこれだけ戦いの手段があるってことさ」

「シロウ。良い戦略眼です。確かにそれなら私がセーブして、胸を貫かれた甲斐があるというもの」

……ん？

いま、褒められたんだよな。

じゃあ何故、ちよつと棘があるように感じるんだろう。

オルタはこちらを見ていない。

手元にあつたせんべいを手のひらで遊ばせている。

「ええ。最初から全力を出すな　とか。見せびらかすように中心地を歩く　だとか。サーヴァントを釣るにしてももっと良い手段があつたというのに。わざわざこのような面倒くさいことを　ええ。良い戦略眼でしたよ、シロウ」

パキンつと。せんべいに亀裂が入る。

破壊されていく。

「ちよ、ちよつと待った。その理由は最初に話しただろ？」

「アレ、ですか。あのような世迷言を、本当に実行する気ですか」

「本気だよ、オルタ」

破壊する手がピタリと止まる。

そう言っつて、陣地の魔術を確認する。
使い魔、なし。

「願望を面白ければ、戦略も奇想天外。これでいて、素人ではないのですから　本当にシロウは度し難い」

「褒められてる？」

「いえ」

ばきんと、今度こそせんべいが割れた。

そのまま両手で握りつぶされていく哀れお茶受け。

何故か粉になっていく姿一つひとつが自分の顔に見えた。

「けなしています。厄介なマスターだ。全く」

そう言っ表情は相変わらず変化は無いが。

何処か苦笑しているように見えるのは、俺の気のせいだろうか。
ともあれ、っつ話しを切り替える。

「これで何人かは俺がマスターであることに気づいたはずだ。だから、本命が出てくる。あんな無様な戦いをしたのもそのためだ。次で、本気を出そう。俺たち二人の力を」

「良い心がけです、シロウ。あの槍兵も現われるかもしれませんが、その鬱憤は次で晴らしましょう。では、次の作戦は」

「ああ　簡単だよ、オルタ」

そして、はつきりと言う。

「明日は学校へ行くぞ。学生の本分は、勉強だしな」

その時のオルタの表情は、すこしだけ愉快なものだった。

第七話『卓袱台の上での戦争』（後書き）

さて、ランサー戦反省終了した士郎とオルタ。次は学校に向かい、あの人と向き合います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8947z/>

faker/stay night

2011年12月31日02時45分発行